

第2部 随筆(作文) テーマ「秋祭り」

一般の部

佳作2

ささやかな幸せ色の秋祭り

鷺尾千恵

「わっしょい、わっしょい。ピー、ピー」さわやかな秋空に響く元気なかけ声を聞くと、遠い昔の秋祭りが鮮やかによみがえる。

私が子ども時代を過ごしたのは昭和三十年代、広々とした田園が次々に住宅地に変わりゆく町だった。

家々の間に少し田が残っているものの、友達に農家の子どもはいなかった。稲刈りを終えた田は絶好の遊び場になる。まだ稲木干しの残る田でおにごっこを楽しんだ。首筋にわらが入り込み、後からかゆくてたまらなくなつた。だが田で遊んだことがばれると叱られるので、母には言えなかった。収穫祭の意はなくなっていた大阪の秋祭り

だった。地域のおっちゃん・おばちゃんたちと子どもたちとの貴重な繋がりだった。

四年生になって私は子ども神輿デビューをすることとなった。前日から、配られた青い法被に豆絞りを身に付け、「わっしょい、わっしょい」と家中を走り回っていた。神輿を担ぐ子供たちは、朝から授業免除と言う特権が与えられる。学校近くを通るとき、私は教室に残された子どもたちにも、得意げに大きく手を振って見せた。「ほうれ、みんなしつかり声をだせい！」鉢巻きに足袋姿の小川のおっちゃんに檄をとばされ、町のあちこちをねり歩く。額から汗が流れ出す。本神輿の後に続く子供神輿。中学生の小西の兄ちゃんたちは神輿を肩にかつぎ、勇ましく進んでいく。下っ端の四年生は神輿の綱を持つただ歩くのみ。それでも自分も勇壮なおっちゃんたちと同じように、祭りの中心にいる気がして誇らしかった。

休憩所で配られたのは、当時まだまだ珍しかった瓶入り炭酸オレンジジュース。世話役のおばちゃんたちに栓を開けてもらおう間も、もどかしかった。おそろのおそろの口に含む。初体験の大人の味は、パチパチ弾けて、のどにチクチクささって痛かった。特別感満載の子供神輿デビューは、遠い秋の日の甘酸っぱい思い出の一コマだ。